

漢語近世音のはなし---(5)m韻尾の消失

中村雅之

§ 17、『蒙古字韻』と『中原音韻』の状況

パスパ文字(1269年公布)によって全音節の発音が示された元代の『蒙古字韻』では、中古音と同様にm韻尾が記されている。つまり、「三、陰、範、凡」などは全てm韻尾である。しかし、これがそのまま実際の音声を反映するものかどうかは検討の余地がある。『中原音韻』においては、おおむねm韻尾を保存しているものの、唇音声母をもつ音節においては、中古音の/-m/は/-n/になっている。「範、凡」などはn韻尾である。これは声母と韻尾の異化作用によるものと説明される。

パスパ文字による漢語表記は、韻母の音形においてはかなり当時の北方漢語を忠実に反映するが、声母においては伝統的なカテゴリーに従って現実の音声から離れる傾向がある。濁音声母の範疇を保っている(しかし表記は必ずしも有声音を表してはいない)のがその主たるものであるが、他にも「夢」「目」を微母相当の字母で表記することも同様である。これはおそらく『五音集韻』のように「夢」「目」を微母とする資料に従ったもので実際の音声を反映してはいない²⁰。声母においてそのような伝統的なカテゴリーを守ろうとする傾向がある以上、他の部分、例えば「範、凡」等のm韻尾についても、現実の音声を反映しない理論的な表記である可能性が否定できないのである。

ただし、別の可能性も考慮すべきかも知れない。それは、パスパ文字が公布された時期(1269年)と『中原音韻』が作られた時期(1324年)とは半世紀以上の開きがあり、その間に「範、凡」等においてm韻尾からn韻尾への変化が生じたという可能性である。とはいえ、13世紀中葉以前の北方漢語資料(公的な性格をもつもの)が見つからなければこの点については結論が出せない。最も有力な資料は契丹小字であるが、管見の限り、「範、凡」など都合のよい字の漢字音は確認できていない。

20 『五音集韻』が『蒙古字韻』の成立に影響を与えた可能性については中村(1993)を参照。

cf. 中村雅之(1993)『『蒙古字韻』と『五音集韻』』『中国語学』240.

ただし、この論文において、収録漢字の配列についても『五音集韻』からの影響ありとした部分については訂正されなければならない。寧忌浮氏の一連の論考により、『蒙古字韻』の収録漢字はほぼ『新刊韻略』から採られたことが、今では知られている。

cf. 寧忌浮(1992)『《蒙古字韻》校勘補遺』『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1992年第3期.

cf. 寧忌浮(1994)『《蒙古字韻》与《平水韻》』『語言研究』1994年第2期.

cf. 寧忌浮(1997)『古今韻會舉要及相關韻書』, 北京:中華書局.

§ 18、『洪武正韻訳訓』の俗音

北方漢語においてm韻尾が完全に消滅した状況を示す最初の資料は、朝鮮で作られた『洪武正韻訳訓』(申叔舟等撰、1455年)である。この資料では、創製まもないハングルによって全音節に音注が付されている。その際、各音節にはまず正音たる音形が示されるが、それは全濁声母のみならず、韻尾に/-p、-t、-k/や/-m、-n、-ŋ/を持つ、甚だ中古音的な体系であり、理論的な産物である可能性が高い。つまり、そのままでは実際の音声からかなり乖離していることになる。そこで、当時の実際の発音(北方音)を「俗音」と称して注記したのである。「正音」のm韻尾は、「俗音」では全てn韻尾で表記されており、15世紀中葉までには北方においてm韻尾が消滅していたことを知る。

§ 19、その他の対音資料

クリーヴズ(Cleaves)やリゲティ(Ligeti)によって研究された一連の14世紀ウイグル文字モンゴル語碑文に見える漢人名や漢語語彙の表記では、「陝sem」のように一般にm韻尾は保たれているが、「范van」のように唇音声母をもつ音節ではn韻尾になっている。『中原音韻』と同様の状況である。

15世紀中葉のハングル資料でm韻尾の消滅が確認されることは上に述べた通りであるが、これ以降の資料でも当然のことながら状況は変わらない。16世紀初の「翻訳老乞大・朴通事」のハングル表記や、16世紀末以降の西欧人によるローマ字資料(これらは官話を表記したもの)でもm韻尾は検出されない。(/-ŋ/を表記するために「m」を用いることはあるが、それは別の問題である)

14世紀末の漢字音訳モンゴル語資料である『元朝秘史』では、中古音においてm韻尾をもっていた字を原則としてモンゴル語の/-m/に当てている。ただし、「～したる(もの)」を表す形動詞語尾「-γ san」の「san」には一貫して「三」(パスパ文字表記でsam)を当てており、これは/san/と読まざるを得ない。頻出する語尾「-γ san」の全てにおいて「三」が用いられているという事実は、単なる例外というよりも、当時の漢語ですでに「三」を[san]と発音する人が相当いたことを物語るのであろう²¹。前項にも述べたように

21 「三」がn韻尾で発音されたことを暗示するもう一つの例は、『元朝秘史』§ 77に見える「三把周」(傍訳:抽着)という表記である。栗林均氏の索引では「salba=ju」と読み、「三[勒]把周」と校訂している。「三」が[san]と読まれていたことを前提にしなければ、モンゴル語の/sal/に引き当てるのは難しい。

cf. 栗林均(2009)『元朝秘史モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』, 仙台:東北大学東北アジア研究センター。

『元朝秘史』の漢字音は原則として北京などの北方音ではなく南京官話に基づいたと思われるから²²、14世紀末の南京ではm韻尾がすでに不安定な音韻となっていたと考えられる。そもそも、南京の周辺で話される呉方言が一般に鼻音韻尾/-m、-n、-ŋ/の区別を厳密に行わない特徴を持っていることから考えれば、北方音の影響が強いとはいえ、南京の言語でも鼻音韻尾/-m/と/-n/の区別が明瞭でなかったことは十分にありうる。明代になって南京から発信された官話の影響によって、北方の言語でもm韻尾の消失に拍車がかかったということかも知れない。しかし、この点についての十分な検証には、なお資料が不足している。

22 cf. 中村雅之(2010)「漢語近世音のはなし---(4)「歌・可・河」の韻母」『KOTONOHA』87.